

日本人よ、人類よ。「よいDNA」を、何処に置き忘れたの！

森 一久

我々人間一人一人は、百万年いやもっと前からの祖先から引き継いだ三十億もの遺伝子DNAを持っている。その「祖先」の中には、有史以降だけ見ても、イエス・キリストや釈迦などの人類の精神改革の先覚者もいるし、劇場でライオンに囚人を食わせて喜んでみていた貴族、もっと近くでは同じ人間を「奴隷」にして何の呵責も感じなかった時代の人々もいる。勿論大部分は、立派な祖先で、多数におられたわけである。

ところで人間の体で現に働いているDNAは、その三分の一程度であり、残りはいわば「予備軍」のような状況で「眠って」いる。それらは、普通の生活のうちでは、或るDNAはRNAの助けを借り、例えば病原菌の来襲時には、ちゃんと起きだして、いろんな対抗策(発熱、それに白血球・血小板や免疫の増産などなど)に働いたりしている。つまり眠っているものの一部は、生理的に必要なとき適時適切に、働いている。

ここ数十年の間に急激に進歩した生物科学は、人間のDNAの大部分の構造を解明するなど、次々に生命の神秘を解き明かしてきた。しかしながら、このようなDNAのスイッチのOn/Offの仕組みは、まだ殆んどが、未知の領域として残っている。ある生物学者は「サムシング・グレート」という言葉を使って、この仕組みは、いわば「見えざる手」として、人知の届かぬ、或いは届くべきで無い分野だ、少なくとも「よほど謙虚に」研究すべき分野であると警告している。

ヒントは歴史や経験の中に

休んでいるDNAの寝起き(ON/OFF)の仕組みは、まだ「群盲象を撫ぜる」の域にあるけれども、最近どうやら、人間の精神状態に動かされることは確からしいと指摘されている。気の早い学者の方は、ガンで悩む患者さんに、落語で大いに笑ってもらったところ、患部が見事に軽快に向かったという報告もある。さらにこのような事例から、人間は明るい精神状態のとき「善い」DNAが目覚め易いという説も有力になっている。たしかにこのような因果関係になるケースもあることは事実であろう。

さてこれからは、筆者が自身の体験や世の中の出来事を踏まえて、素人なりに考えぬいて来たことである。前記の学者の方も、例として「火事場の馬鹿力」を上げ、人間は、とっさに懸命になれば、平素考えられない位の大きな力を出すのだという例を指摘されている。突然の父の死で悲嘆にくれ、遺影を胸に出場したオリンピック選手が見事金メダルを取ったのを見て、私は、「彼のDNAが動いた」との感を禁じえなかった。つまり人間は、八方塞り、四面楚歌の絶体絶命の状況になったときも、なにかのきっかけで、眠っていたDNAたちが鳩首協議の上、あらゆる対策を講じるというような事があるに違いないのではないか。

人間の集団の精神や行動についてはどうだろうか。日本国の場合、明治維新以降、国民が全体としてまとまって行動した重大事態はいくつかあった。そのうちの二つ、日露戦争の戦いぶりと、敗戦後のゼロからの復興時とが、私の見るところ日本人が最も立派だった(今の流行語で言えば「品格の高い」)ひと時の時間ではなかったかと思う。

日露戦争のひと時 日本が黒船を受けて立ち開国して初めて、桁外れの大国ロシアを相手に世界注視の中で始まった戦いは、幾つかの幸運もあって、優勢に進めえたが、その中でロシア軍人捕虜に対する日本国民の礼儀正しい取り扱いには、欧米諸国も舌を巻くほどで、折しも欧米で感銘を持って読まれていた新渡戸稲造「武士道」[英文で出版、後に日本語でも]などと相いまって、日本は文明国として評価され、同情・同感が高まり、英米の日露の講和を支援・斡旋となったのである。そればかりでなく、戦後、乃木元帥は仏語に堪能な津野田中将をモスクーに派遣、「ステッセル司令官は立派、日本の勝利は時の運。同司令官に敗戦の責を負わせないでほしい」と露政府に進言さえしたという。

しかしながら、国民はこの勝利に酔い始め、講和条約の交渉団は、「もっと賠償を取るべきだ」と、投石をもって迎えられるような事態になる。すなわち、この辺から日本人集団の中では、思い上がりが昂じて、「善いDNA」は漸次影を潜めたか、(野蛮なDNAなどがよみがえったのか)遂に先の敗戦へと、奈落の谷を転落していったわけである。

敗戦後の日本のひと時 無謀で大義に乏しく、列強に挑んだ太平洋戦争、「武士道」のかけらも無い戦いぶりの末、昭和二十年八月の無条件降伏で日本が丸裸になったとき、戦争責任も勝者の裁判に任せ、賠償も相手の温情に甘えたりして、今日まで未決着に残っている。為政者は保身に走り、経済の復興方針も占領軍任せという状態のなか、一方国民は、こうなった責任は自らにありと受け止め、(全体として)凜とした態度で一人一人が懸命に生き、真剣に働いた。長く統治した朝鮮半島は日本の敗戦で南北に二分されたが、その朝鮮戦争という「特需」が日本の産業経済のキッカケとなって、半世紀にして今日の「経済大国」になった。

米国の庇護のもとで楽な道に甘んじた日本と国民は、この間精神の支柱を失い、「損得」を軸に動くという印象を国際的にも定着させてきたと言えようか。

精神の荒廃からどう抜け出すか

今日のわが国の諸々の矛盾・荒廃は、少なくとも部分的には、所詮国民(全体および個人)のDNAの働きの状態を反映しているに違いない。この視点から、原因・誘因となってきた問題を次回から論じたい。言うまでもなく、その中には、教育、社会システム、テレビのあり方、ITの影響などが含まれる。

注記 本稿は、生物科学には素人の筆者が、若干勉強して、自身の体験や見聞もとにまとめたものです。専門家の方の目にとまった場合など、是非ともいろいろご教示頂きたいと存じています。

(2009. 2. 5)

このページを印刷する